

# FOREIGN CITIZENS LIVING IN FUKUOKA

外国人が見た  
福岡・九州・日本



vol. 1

## 私が福岡に滞在しつづける理由

エリック・オルソンさん <Eric M Olson>  
(29歳 米国ミネソタ州出身)

●プロフィール  
インターナショナルハウス福岡勤務 同校主任英語教師  
フリーランスライター・エディター

今月で来日して6年目に入る。日本に4年以上滞在している多くの外国人同様、こんなに長く滞在するとは思ってもしなかった。当初の予定では1、2年滞在して働き、お金を貯め、同時に異国の文化を肌で学んで、帰国後は映画監督養成学校へ通うはずだったのだ。それがいつの間にか変更になり、ついに消えてしまった。いったい福岡の、そして日本の何が、多くの外国人の計画を変更させてしまうのだろうか。

来日した年には、多くのことに混乱させられた。「どうしてこれがないのだろう。どうしてこんなやり方をするのだろう」。全てのことか疑問に思えたものだ。しかし月日がたつにつれて、それぞれの社会には、独自の生活形態や問題の対処の仕方があるのだ、ということにだんだん気づくようになっていった。唯一の正しい生活の仕方を知っている国なんてどこにもないのだ。このことに気づくと、日本人のやり方を変えるのではなく、自分自身が日本人のやり方に合わせるようになり、日本社会に溶け込む努力をするようになった。

「7歳位の子供達は、子供どうしの時に会うとたいい『ハロー』と大声で言うのに、なぜ両親が一緒だと突然『外人さん』になるのだろうか」「どうしてみんなが私に注目するのだろうか」「交通事情は悪く、特に道幅が

とても狭い(西新・重留間が最悪)」「バスの運賃を始め食料品やビールなど、ほとんどすべての価格は高いように思える」「テレビの野球中継は試合が終了する前に終わってしまう」「バスも電車で半時半までしかない」「週末以外定期的にオールナイト上映している映画館は一館もない」「警察は暴走族の取り締まりを強化しようとしめない」「市内にたち並ぶ、創造性より実用性を優先して造られたように見えるビル群」。

当時混乱させられた母国との違いは、今思い浮かべるだけでもこんなにある。その他、「型にはまりすぎた教育制度は、自由と創造性を失っていないだろうか」「政府は一般市民の要求に応えているのだろうか」「言葉には出さないけれど人種差別や性的差別がないと言えるのだろうか」「この国の女性は、決められた限界以上には進出できないのではないだろうか」などといった、より深刻な疑問も抱いたものだ。

しかし、私の母国が抱えている問題に比べたら、私が気づいた日本の問題など小さなものなのかも知れない。「コントロールできないほど多い犯罪発生件数とそれに対する恐怖」「教育制度とアメリカ精神の崩壊」「あからさまな人種差別に性的差別や同性愛者差別」「他人に対する思いやりの欠如」「いきすぎた個人主義」など、私の母国が抱える問

題は、遥かに深刻だ。

日本にはまだまだ滞在するつもりだ。私は日本社会をとても素晴らしい社会だと思う。ここでの生活は本当に楽しい。それに楽しいだけでなく、私を釣り合いのとれた人間にしてくれる。私の中のアメリカ的な個人主義は日本で教えてもらった集団主義とうまく釣り合い、おかしいと思うものには疑問を持たずにいられない習性は、これもまたここで学んだ、集団が同意していれば認めてしまう日本人の考え方とうまく釣り合って、私をよりバランスのとれた人間にしてくれるのだ。おもしろそうなことはまだまだたくさんありそうだ。ここではいつでも、何か新しいことを学んでいるのだから。

外国人の出入りが頻繁で、国籍や考え方が異なる外国人が混在している町で暮らすのは、とても刺激的なことだ。日本はいま、外国人と共生できるような環境を、必死になって思い描こうとしている。このようなときに、外国人の一人として日本に滞在することは、とても興味深い。

私は外国人であり、日本社会の部外者ではあるが、良き勤労者、良き市民であるように出来るかぎり心掛けようと思っている。これからの数年間(3年、4年それとも…)は、ここが私の国だ。

ENTRANCE